

## 第二百八十六回 青葉会

平成二十二年一月五日（火）吉例初芝居見物（歌舞伎座）

一月二十八日（木）初句会（丸紅・談話室）

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉

石川清 今井紀久男 小川恭延 大林猛 柿崎忠彦 小西弘子 朱牟田恵洲

土谷堂哉 豊田ゆたか 中山芳博 橋口隆 福島正明 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 佐野明彦 南平和夫 宮内規雄 山本三恵 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 星田啓子 村田くに子 山崎陽亮

ゴシックは選者の天

《選者吟》

取り取られ国訛飛ぶ歌留多取り 万里子（清・堂・允・く）

餅花や歌舞伎座と娘（こ）は同い年 全（紀・恭・正）

信じたし一皮剥けて葱真白 全（正・亜）

ででつぼう突（つ）いた蜜柑を食べ尽せ 全（恵・天）

内科外科歯科を受診し日脚伸ぶ 全

《互選句》

十点 春近しキリンの首の少し伸び

正明（孤・弘・恵・敏・堂・ゆ・隆・

允・亜・天）

八点 ☆住所録は私の履歴書賀状書く

天牛（万・孤・弘・龍・堂・隆・亜・

陽）

七点 ☆書初めは祝儀袋の表書き

全（万・清・猛・忠・ゆ・允・陽）

☆末つ子の涙で終（しま）ふかるたかな（陽…新年だから祝儀でいいのですが、むしろ「不祝儀袋」としたほうが面白い句になったと思う）

弘子（万・忠・堂・隆・正・陽）

六点 ☆仕舞湯や遠くかすかな除夜の鐘（陽…負けて泣きじゃくる末っ子の勝気な性格が見えて楽しい）

堂哉（清・恭・敏・允・啓・天）

☆母許（ははご）りの新聞に巻く寒卵（陽…遠ければかすかは当然。仕舞湯。遠い、かすか、除夜と同系列の言葉が並び過ぎ）

弘子（万・龍・啓・く・天）

☆書初や揮毫の見せる老いの意地（清・猛・堂・く・亜）

和夫

☆南溟に慰霊の旅やクリスマス（陽…クリスマスという季語が絶妙）

紀久男（万・孤・弘・陽）

成田屋は六法で寒さを蹴散らしぬ（☆…「を」は不要。陽…散文的なので↓「六方で寒さを蹴散らす團十郎」）

猛（忠・恵・敏・芳）

合はす手も年を取りたり初詣（恭・ゆ・隆・正）

忠彦

寒中の書展気魄の滾（たぎ）りたり（紀・龍・敏・ゆ）

弘子

門松や地球四十六億歳（恭・孤・恵・堂）

明彦

快活な青年介護士春隣（敏・ゆ・隆・允）

恵洲

ふるさとを慕ふ一椀鰯雑煮（ゆたか（猛・啓・陽・天）

ゆたか

（陽…どの雑煮？故郷を偲ぶ気持が「一椀」によく出ている）

そらお

冬晴や裾まで見せて今朝の富士（恭・ゆ・亜）

弘子

カフエラテのミルクのハート凍てる夜（孤・恵・芳）

堂哉

遥かなる赤道直下晦日蕎麦（紀・忠・く）

新春大歌舞伎「勸進帳」の弁慶

心技体満ち團十郎の初芝居 ゆたか（紀・允・く）

寒灯の一つ又消え数寄屋橋 正明（清・恭・敏）

凍て空や煌めく星のセレナーデ 規雄（龍・ゆ・芳）

ハイカーを独りで引き留め水仙花 そらお（龍・芳）

二点

建替へを惜しむ人波初芝居  
極附弁慶見入る春着かな

紀久男 (弘・正)  
全 (恭・亜)

娘引く弦音つるお 冴ゆるや的を射る

忠彦 (啓・く)

星凍てる大人になれぬ議員達

全 (堂・正)

神宮に弦音響けり射初いぞめ 式

全 (弘・陽)

(陽：正月の凜とした空気が伝わる佳句。響けりとわざわざ過去にすることなく「弦音つるお」響く)でいい)

知らぬ間に玉手箱開あく初鏡

弘子 (隆・亜)

(陽：開くを 開いていた という状態にしてほしかった)

☆ 初鴉五葉の松をゆるがせり

明彦 (芳・啓)

☆ 読み方の子の声ぢから歌がるた

堂哉 (万・恵)

馬齢をば重ねなおよし寒卵

ゆたか (清・芳)

活断層を明らかにする寒落暉かんらっき

正明 (弘・恵)

(陽：「寒落暉活断層を明らかに」としてはどうか)

☆ 初芝居付け句が告げる討入り日

全 (万・紀)

(「松浦の太鼓」の其角と大高源五)

初夢の途切れ途切れや走り書き

隆 (猛・啓)

春着せし見合の折も木挽町

亜也 (紀・天)

(陽：俳句は過去ではなく「今」を詠みたいものです)

気まずさに蜜柑二切れほおぼりぬ

三恵 (猛・天)

凜として富士を仰ぐや冬の朝

清 (猛)

青海鼠なまこ 笑みのこぼれし句の味

全 (紀)

阪神大震災十五年

風花や人気まばらの長田地区

紀久男 (弘)

火酒干してマニラの父兄と踊らんか

全 (正)

初芝居歌舞伎座跳ねて清清すがすがし

恭延 (忠)

年配者集ふカラオケ冬昼間

全 (猛)

蒼穹に冬の梢がひかる山

猛 (清)

歳時記を開いてひとり初句会

忠彦 (龍)

遺影の母十歳下とおとしした や寒灯下

恵洲 (隆)

☆ 歌舞伎座の名残りの幟初写真

ゆたか (紀)

☆ 亡き父のレシピそのまま雑煮汁

堂哉 (万)

☆ 黙然と霜柱踏む犬友に

芳博 (万)

(↓犬つれて)

薄氷うすらい が身構えている陽陰かな

全 (啓)

小春日の家庭菜園にぎわえり

全 (敏)

初旅や朝日を湾に注ぐ部屋

隆 (孤)

命日のご縁で旅する松の内

全 (忠)

☆ 初雪の老いの空見か風に舞ふ

和夫 (万)

初映画森繁淡島伴堺

亜也 (芳)

松飾り竹の添ふ座や立替はる

全 (忠)

初場所や草原の風吹き荒るる

盛雄 (紀)

●次回青葉会

二月二十五日(木) 午後六時〜九時

(丸紅・談話室)

三月二十五日(木) 全

(全)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句

以上文責

紀久男

平成二十二年一月（初句会・二百八十六回）

一、正月の芝居に恒例の東西五座（歌舞伎座、演舞場、国立劇場、浅草公会堂、大阪松竹座）に三越劇場（新派）が加わり、いづれも切符入手難の大入り。今年五月から建替え工事に入り、向う三年間休演の歌舞伎座は一番人気。五日（火）昼の部の総見には久しぶりに高橋敏郎さん市原弘之さん本田博昭さん由美子さんを含め15名参加されました。

眼目は團十郎の弁慶（ゆたかさんの三点句にありますように素晴らしい出来。極附の弁慶で幸四郎ら他の俳優の追隨を許しません）と吉右衛門の「松浦の太鼓」（正明さんの二点句。其角の「年の瀬や水の流れも人の身も」に付けて大高源五の「明日待たるるその宝船」。吉右衛門は今一番上手い役者ですが残念乍ら俳句をやりません。先代吉右衛門と彼の弟子達は殆どが虚子の弟子でこの芝居を演じた時は皆愉しそうだった由です）

「なごやかな雪の句会の當り役」

「客沸かす酒の名尽しの台詞（せりふ 冴へ）」

（「石切梶原」秀調の呑助）

二、初句会の二時間前に一年ぶりの龍平さん困んで細井和男さん天牛さんらと歓談しました。御友人の中野一灯さんより、お世話されておられる伊吹嶺関東支部・擗句会の合同句集を頂戴しました。

三、句会は大坂からの堂哉さんを含む15名出席。投句6名。猛さんの初披露で天牛さん正明さん弘子さんが高得点でした。先生お手製のチヂミ、堂哉さんの韓国海苔、弘子さんの能登の美酒「池月」（二種類）、恵洲さんの「澤乃井」孤舟さんの「越の寒梅」隆さんの焼酎「はろぼろ」と小生のフライピン土産（ラムとドライフルーツ）。・・・四合壺合計6本平げそれにどんどん追加。そして二次會（三幸園別館）・・・今年も思いやられる初句会でした。

#### 四、関係者近詠

生姜湯や不定愁訴を有めつつ	万里子	手袋のまま邂逅の握手かな	奥西邦夫
津軽富士津軽の友と仰ぎ秋	全	（「NHK俳句」二月号 西村和子選）	
秋昼をトレモロ尽す津軽三味	全	流水に影を宿して赤とんぼ	孤舟
千歳飴も晴着も放りいつもの児	全	律の風パン工房の煙出し	全
余り蜜柑賭けてじやんけん本気なる	全	帰心ふと櫓田の上の空深し	全
禁煙を望めど強ひず日向ぼこ	全	心経を写し終へたり虫時雨	全
片言の介護人笑む石路の花	弘子	碧天に近道はなし鷹渡る	全
転びたる妹起して七五三	全	——『遠嶺』2月号——	
子宝を待つ家の門花八ツ手	全	寒鯉のかすかに尾鰭ゆらしをり	允章
全通の真近かなる道赤蜻蛉	和夫	寒雀こぼれて弾んで又軒に	全
秋夜長文字の大きな漱石本	全	海鼠腸の胡散臭さを啜りけり	陽亮
築地堀冬の汗拭く娘俣夫	全	万象をミダスの金に初日燦	全
——『萬緑』2月号——		ひきしぼる腕のしなりや弓始	全
正月や満百歳と古希の母子	全	射手に見る武士の一分初稽古	全
小画廊覗く気紛れ日脚伸ぶ	全	若水や神社へ向かふ闇の声	全

平成二十二年二月十三日

紀久男記